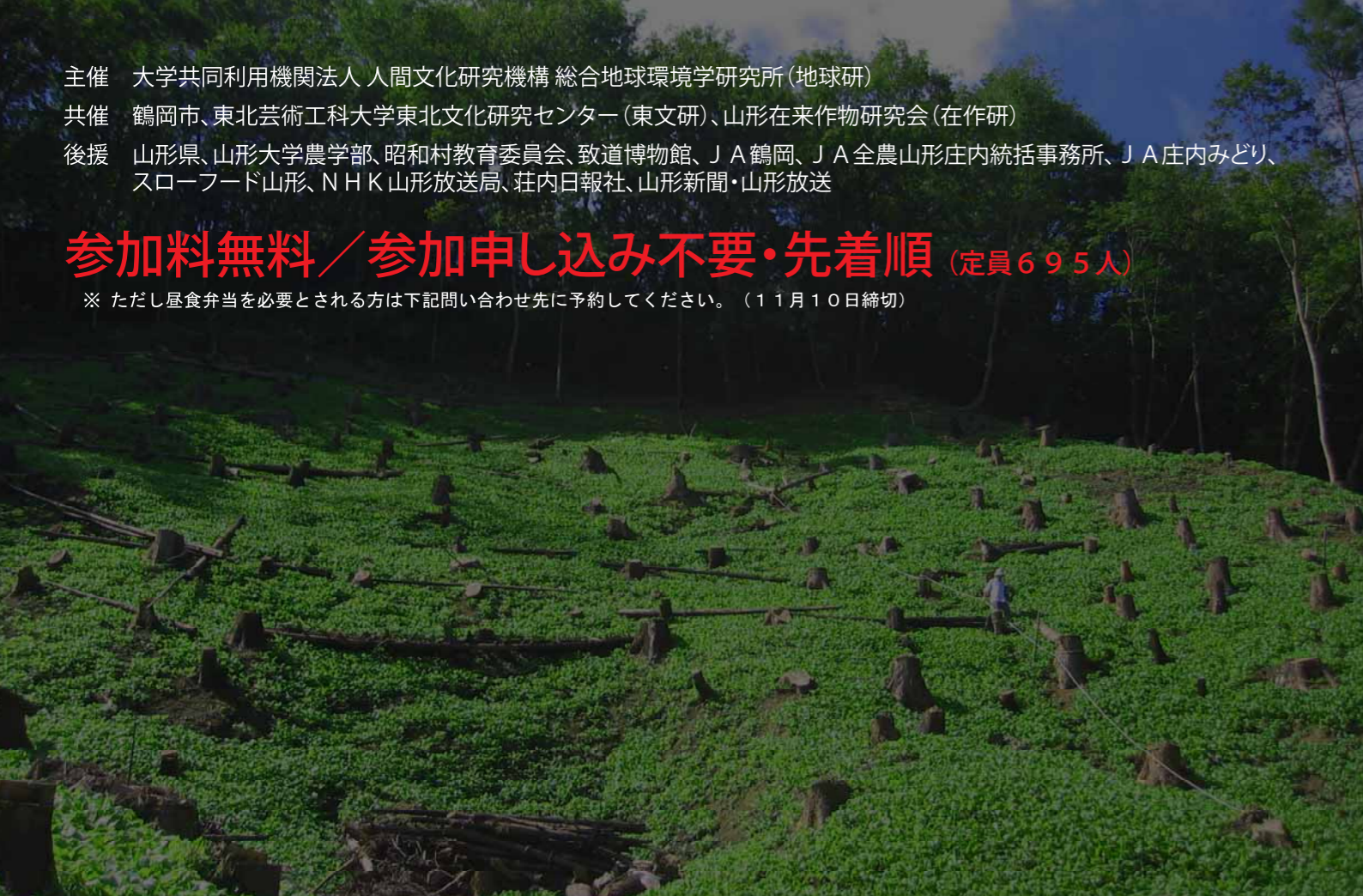


主催 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 (地球研)
 共催 鶴岡市、東北芸術工科大学東北文化研究センター (東文研)、山形在来作物研究会 (在作研)
 後援 山形県、山形大学農学部、昭和村教育委員会、致道博物館、J A 鶴岡、J A 全農山形庄内統括事務所、J A 庄内みどり、スローフード山形、NHK山形放送局、荘内日報社、山形新聞・山形放送

参加料無料／参加申し込み不要・先着順 (定員695人)

※ ただし昼食弁当を必要とされる方は下記問い合わせ先に予約してください。(11月10日締切)



問い合わせ先



総合地球環境学研究所 (担当: 鞍田崇)

京都市北区上賀茂本山457-4

TEL. (075) 707-2382 FAX. (075) 707-2508 kurata@chikyu.ac.jp

会場へのアクセス



温海ふれあいセンター
 山形県鶴岡市温海577-1
 TEL: (0235) 43-4411

東京方面より						
飛行機	羽田空港	55分	庄内空港	リムジンバス 40分	鶴岡 路線バス・JR 40分	あつみ温泉
鉄道	東京	上越新幹線 2時間	新潟	羽越本線 1時間30分	あつみ温泉	
自動車	練馬IC	関越自動車道 4時間15分	中条IC	国道7号線 1時間20分	温海	

仙台方面より							
バス	仙台	3時間	鶴岡	30分	温海		
自動車	仙台宮城IC	東北・山形自動車道 1時間30分	月山IC	国道112号線 40分	湯殿山IC	山形自動車道 30分	鶴岡IC
	鶴岡IC	国道7号線 1時間20分	温海				

福島方面より							
鉄道	福島	山形新幹線 30分	米沢	米坂線 2時間	坂町	羽越本線 1時間	あつみ温泉
自動車	郡山IC	磐越自動車道 2時間20分	中条IC	国道7号線 1時間20分	温海		

第2回 焼畑サミット i n 鶴岡

焼畑と野焼きの文化 —今、東北が熱い!—

2008年11月16日(日)
 10:00 - 17:30

会場・温海ふれあいセンター

第2回焼畑サミットin鶴岡 焼畑と野焼きの文化—今、東北が熱い!—

第2次世界大戦後間もない時期までわが国でも広範囲に焼畑が行われていました。なかでも東北日本では、主に太平洋側の雑穀栽培を中心とする焼畑、および日本海側と福島県で行われてきたカブ栽培を中心とする焼畑が人々の食生活を支えてきました。また焼畑だけでなく野山への火入れの習慣も東北各地にあり、古くから良質のワラビを確保し、さらにはカヤやカラムシの栽培管理を行うための手段ともなってきました。高度経済成長期以後の生活スタイルや価値観の変化にともない日本の焼畑実践地は激減しましたが、東北地方にはこうした火を利用した耕作がいまも数多く残っています。また最近の傾向として焼畑や野焼きを地域のアイデンティティの要として草の根レベルで復活していく動きもみられます。

山形県鶴岡市で開催される今回のサミットでは、このように焼畑・野焼きをめぐるいま日本で最も熱い地域ともいえる東北地方にスポットをあてます。今回のサミット会場となる鶴岡市温海地区は、三百年以上にわたって温海カブの焼畑を継承し今なお焼畑を生業としていとなむ農家が多数残る、日本でも数少ない地域であり、今後の焼畑のあり方を考える上でまさにふさわしい場所といえます。

アマゾンをはじめとする熱帯雨林地帯における粗放かつ大規模な火入れによる森林の破壊は地球温暖化を促進する元凶であるといわれることもあり、昨今の焼畑に対するまなざしには厳しいものがあります。しかしながら、火を介した人と自然との関係史をひもとくと、それぞれの地域で持続的に生きるための数多くの「暮らしの知恵」とでもいうべきものが見出されます。本来の焼畑は環境破壊の元凶どころかむしろ、自然との調和ある暮らしの典型例といえるでしょう。そこには、私たちが将来にわたって里山を健全に保ち、自然と関わりながら生きていくための様々なヒントが内包されています。本サミットが、焼畑や野焼きといった火を介した耕作、「火耕」の意義を再認識し、その生活文化を継承するための提案の場となることを開催関係者一同願っております。

なお今回のサミットは「山形在来作物研究会・公開フォーラム2008」として開催されるものでもあります。

プログラム

午前の部 10:00~12:15

開会挨拶 富塚陽一氏(鶴岡市市長)

趣旨説明 佐藤洋一郎(総合地球環境学研究所教授・里プロジェクト代表)

見る—東北の焼畑記録フィルム

◆ 1.カブの焼畑



「東北発見：赤カブに生きる—山形県温海町—霞」

制作：NHK山形 / 1993年 / 27分

山形県鶴岡市—霞地区(旧温海町—霞)では、「温海カブ」とよばれる赤カブを先祖代々焼畑で作ってきた。同地区に暮らす人々のふれあいと温海カブに込める思いを、嘉右衛門(かえもん)家を中心に生き生きと描いた作品(1993年10月23日放映)。



「牛房野のカノカブ—山形県尾花沢市牛房野の焼畑」

制作：東北芸術工科大学東北文化研究センター / 2002年 / 48分

山形県尾花沢市牛房野では、今でも佐藤昭三さんがたったひとり焼畑でカブを作り続けている。焼畑を初めて知る学生たちが昭三さんと交流しながら新鮮なまなざしで焼畑作業の一年を追った。(第23回「地方の時代映像祭」市民自治体部門の優秀賞受賞)

◆ 2.カラムシ焼き

解説：星為夫氏(昭和村からむし生産技術保存協会会長)



「からむしと麻—福島県大沼郡昭和村大芦・大岐」

制作：民族文化映像研究所 / 1988年 / 35分

現在本州では福島県昭和村においてのみ生産されている、衣料材料のカラムシ(苧麻)。火入れをとまなうその生産過程からは、焼畑が食物生産のみでなく、衣食住、生活全般に関わるものであったことがうかがわれる。昭和村のからむしと麻の栽培・生産の工程を丹念に追った佳品。

※写真提供：昭和村からむし工芸博物館

午後の部 13:00~17:30

聞く—東北の焼畑実践者の声

◆ パートI

宮城：熊谷秋雄氏(石巻市・熊谷産業：ヨシ) + 大沼正寛氏(東北文化学園大学准教授)
福島：山垣光栄氏(三島町・カノヤキ組：桐) + 遠藤由美子氏(奥会津書房編集長)

休憩 (15分)

◆ パートII

秋田：仁賀保の焼畑実践者(カブ) + 佐々木英憲氏(秋田北高校教諭)
山形：温海の焼畑実践者(カブ) + 平智氏(山形大学教授・山形在来作物研究会幹事)

休憩 (20分)

鼎談「今、東北が熱い! 焼畑と野焼き—火耕文化の可能性—」

赤坂憲雄氏(東北芸術工科大学東北文化研究センター所長)
江頭宏昌氏(山形大学准教授・山形在来作物研究会副会長)
進行：佐藤洋一郎(総合地球環境学研究所教授・里プロジェクト代表)



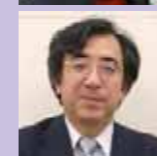
赤坂憲雄(あかさかのりお)

東北芸術工科大学東北文化研究センター所長。専門は日本思想史・東北文化論。著書に『東北学へ』全3巻(作品社)、『東西／東北考—いくつもの日本へ』(岩波新書)、『岡本太郎の見た日本』(岩波書店)など。



江頭宏昌(えがしらひろあき)

山形大学農学部准教授。山形在来作物研究会副会長。専門は育種学・植物遺伝資源学。共著に『植物遺伝育種学実験法』(朝倉書店)、『どこか畑の片すみで—在来作物はやまがたの文化財』(山形大学出版会)など。



佐藤洋一郎(さとうよういちろう)

総合地球環境学研究所教授。専門は植物遺伝学。著書に『縄文農耕の世界』(PHP研究所)、『里と森の危機(クライシス)—暮らし多様化への提言』(朝日選書)、『よみがえる緑のシルクロード』(岩波ジュニア新書)など。

閉会挨拶 高樹英明氏(山形大学教授・山形在来作物研究会会長)

総合司会・コーディネーター



原田信男(はらだのぶお)

国士館大学21世紀アジア学部教授。専門は日本生活文化史・日本文化論。著書に『歴史の中の米と肉』(平凡社ライブラリー)、『中世村落の景観と生活—関東平野東部を中心として』(思文閣史学叢書)、『江戸の食生活』(岩波書店)など。

ロビー展示

つちだよしはる絵本原画展 『おじいちゃんのカブづくり』より

つちだよしはる(土田義晴)

1957年山形県生まれ。日本大学芸術学部在籍中、中谷貞彦・千代子夫妻に師事。『きいろいばけつ』(あかね書房)、『ゆめをにるなべ』(教育画劇)、『このはのおかねつかえます』(佼成出版社)がそれぞれ青少年読書感想文全国コンクールの課題図書になる。

関連行事

11月14日(金)

地球研・里プロジェクト火耕班公開講座
焼畑民俗文化論のゆくえ

会場：致道博物館・講座室
(山形県鶴岡市家中新町10-18)

時間：15:00~17:00

講師：野本寛一氏(近畿大学名誉教授)

※聴講は無料ですが、入館料が必要です。(一般700円)

過去の関連企画

プレイベント「中山間地域における持続的な土地利用シンポジウム」
2005年11月11日・12日 於島根県中山間地域研究センター

主催：総合地球環境学研究所
共催：島根県中山間地域研究センター

第1回サミット「焼畑サミット in 高知」

2007年11月24日・25日 於高知女子大学・高知城ホール

主催：総合地球環境学研究所
共催：焼畑による山おこしの会、高知女子大学

